

[シンポジウム報告④ パネルディスカッション]

## 東京2020オリンピック・パラリンピックで 千葉をどう変える？

国境を超え、バリアを超え、世代を超えて

熊谷 俊人・高橋 秀文・馬場 宏輝・藤森 孝幸  
三幣 利夫・藪内 正樹

**藪内** パネルディスカッションのモデレーターを務めさせていただきます、経済学部の方と申します。パネルディスカッションの冒頭は、私ども敬愛大学の地域連携センターの藤森室長から、敬愛大学におけるパラスポーツ体験、あるいは普及、その活動についての報告をさせていただきます。報告が終わりましたら、パネリストの皆さん、前に移動していただいて、ディスカッション始めさせていただきます。それでは、まず、藤森室長。よろしくお願いたします。

**藤森** 皆さま、こんにちは。敬愛大学の藤森と申します。貴重な時間をいただきまして、非常に簡単ではございますが、敬愛大学が今回のパラリンピック、オリパラを契機に、学生たちとどう関わっているかについて、ちょっとだけ紹介させていただこうと思います。

私自身は1968年の生まれなので、前回の東京オリンピックは知りません。知っているオリンピックはといいますと、長野です。閉会式の司会を務めた萩本欽一さんが、「みんなで選手にありがとうって言おうよ。どうかな」というふうに、禁断のアドリブを利かしてしまった事件といいますか、しかし会場がわあっと盛り上がったという、いいお話があったんです。私は当時中学校の英語の教師をしていたんですが、それが中学生向けの英字新聞に載ったので、中間試験の問題に出しちゃったんですね。感想を日本語でも英語でもいいから書いてごらんというのを出したことを、ちょっと思い出しております。

さていよいよ千葉に来ました、このオリパラが。先ほども貞石様からお話があったように、今日でパラリンピックまで409日、オリンピックまでは377日になりました。既に先ほどもご紹介いただいたように、様々なプレ大会や市民参加型のイベントも開催されておりまして、その中に私どもの学生たちも少しずつ関わるような機会を頂戴しております。学生たちの話の前に少しだけ、大学としてどのように関わっているかについてお話しさせていただきます。

今、ちょうど市長がお見えになりましたが、千葉市と市内にある大学では毎年1回、学長が出席する形で様々な市の重点施策について意見交換の機会がございます。平成28年度はレガシーの創出というテーマでございました。間もなく行われます今年度も、いよいよ1年後に近づいてまいりましたので、あらためてレガシーの創出についても一度考えようというような話題になるそうです。

手前どもの学長の三幣が28年度のときに、「大学として取り組めることは、まず知らしめることである」、「知らしめて、関心を持ってもらい、毎年続けていくことで、これをレガシーにしていこうじゃないか」という発言をされました。熊谷市長からは、「障害者スポーツ、パラリンピックについての意識が大きく変わっていくのではないかと期待がある」というようなご返答があったというふうに、議事録にありました。

それでは実際に学生たちは、オリパラを通じて、とりわけパラリンピックの活動を通じて、何を得られるのでしょうか。私は

「コミュニケーション力の腕試し」ではないかと思います。いわゆる「コミュ力」の必要性を、学生たちはこの機会にたくさん体感できるでしょう。私は大会ボランティアも都市ボランティアも応募をして、両方とも面接を受けました。そのときに「英語はできますか」と聞かれ、一応英語の教師だったんで、「英語はできます、中国語も少々できます」というお話はしましたが、求められることは英語の能力ではありません。私ども敬愛大学には、系列に4校の高校があるんですが、そこに伺って校長先生に「都市ボランティア、大会ボランティアに申し込んでみるように、生徒に伝えてください」と言ったときに、「英語ができないと駄目だと思っていました」というふうに言われました。いや、違うんです。英語や中国語じゃないんです。ボディーランゲージでいいんです。Makuhari Messe? This way. 実はこれだけで済むんですよ。

「おもてなし」という言葉が今日も何回か出てきました。滝川クリステルさんが、招致スピーチのときに使われた「おもてなし」は、若い人たちがどんどん関われる分野だろうと思っています。ことパラリンピックにおいては、「障害がある人もない人も、一緒に」です。冒頭、司会の根本先生から、経済学部で電動車いすの学生がいるというお話をされたように、電動車いすの障がい者であっても本学は受けられます。勉強していただけます。そんなに難しい話じゃありません。エレベーターやスロープがある校舎に、その学生の授業を作ればいいだけの話なんです。

ですから、私たちが考え、大学生に言っているのは、「観戦」「介助」から「参加」。見るだけ、あるいは障害がある方だから支えるだけではなく、参加しよう。参加の仕方は、いろいろな方法がありますよと。これは、これまでも高橋先生をはじめ、先生方からいろいろな形で、こういう関わり方があるよねってお話をいただきました。つまりパラスポーツって特別なものじゃないよね、ということなんです。

ところで敬愛大学。実は福祉系の学校でも何でもありません。経済学部と国際学部の大学です。ですから、例えば淑徳大学様

が長いこと車いすバスケットボールに取り組んでこられたとか、そういったようなことは本学ではなかった。千葉市のご協力をいただきながら



藤森 室長

「パラスポーツ交流会」でフライングディスクをやりました。ポッチャもやりました。フライングディスクをやったときのことを、テレビで取り上げていただきましたので、ちょっとだけ見てください。

(ニュース映像：アナウンサー) 皆さんは、フライングディスクという競技をご存じでしょうか。この競技を通じての交流イベントが行われた話題です。こちらがフライングディスクです。この直径25cmほどのプラスチック製の円盤を回転させて投げる競技で、子どもの頃、フリスビーという呼び名で慣れ親しんだ方も多いのではないのでしょうか。このフライングディスクを使ったパラスポーツ交流会が、10月14日、敬愛大学稲毛キャンパスで行われました。

(ニュース映像：藤森) このイベントでは、一つは機運を高めていくこと、もう一つは大学としてこれを機会に障害のあるなしに関係なく、みんなが一つの共同体として生活していく大切さというものを訴えていきたい。今日は敬愛大学の大学祭が行われておりまして、今回は、千葉市や競技団体の方などにご協力いただきまして、フライングディスク、プラスチックの円盤を使って、それを投げる競技をいくつか取り入れて、交流を深めていただこうと考えています。

これは大学祭のときにやったもので、大学祭のときということは不特定多数の方がお見えになります。あらかじめ来てくださいねってやった方は誰もいないんです。雨も降っていました。障害がある方もたくさん来てねと呼びかけたのですが、「雨が降って行けなかったんですよ」という方がたくさんいらっしゃいました。確か、この日は

60人ぐらいお越しいただいたと思います。その代わりではありませんが、例えばもう売るのがなくなってしまったテニス部の部員がフライングディスクをブーンと投げて、いかに長距離投げるかという「ディスタンス」競技に挑戦し、できたってウワーッと騒いでるわけです。こんなことがございました。

さらに今年の3月には、シッティングバレーボールのバラ講座というものも行いました。これは、地元の方であればご存じかと思いますが、敬愛学園高校は今年、インターハイに出場できるようになりました。女子のバレーボールが非常に強うございます。私が部長をしている本学の女子バレーボール部も、関東では今のところ、十数位。関東2部の上位にあります。この子たちに左の写真でマイクを持って教えて下さってるのは、真野さんですね。シッティングバレーボールの女子全日本の監督さんです。お越しいただいて、お話をいただき、実際にやりました。普通の一般市民ではなくアスリートである学生に体験をさせてくれるということで、お願いをしたんです。

次にしゃべっているのは、大学女子バレー部のキャプテンです。

(ニュース映像：学生) 想像してたシッティングバレーと全然違って、細かいルールもあって、すごく奥深いなって感じました。楽しかったことは、結構コートが狭くて、人と人との間隔が狭かったんで、声掛けも重要で、普通のバレーよりも人と人とのコミュニケーションが重要になってくるスポーツだなと気付いたところです。

はい。こういうふうな気付きをしてくれましたね。県、市、NHK等が共催でパラスポーツフェスタ。こちらのほうにも学生が昨年度は60名参加をしてくれました。特にこの白いポロシャツの2人は、学生実行委員会という形で運営に参画をしてくれました。この子たちが今、化けてます。化けて、本日お越しの千葉商科大学の和田先生に大変お世話になったわけです。

さらに、市内でこのようなイベントも行われました。ついこのあいだの大賀ハスマツリ。これは、今日もお見えいただいてお

ります、千葉経済大学の栗沢先生や、帝京平成大学の平塚さん等も一緒に、千葉市内中心の大学で作っているコンソーシアム、「ちば産学官連携プラットフォーム」で、ポッチャ体験会という取り組みをいたしました。子どもたちが集まってくるんです、ポッチャ。中には「小学校でやったよ。もう1回やりたい」といって、何回も来てくれるんです。お父さん、お母さんは、早くハス見に行きたいのにです。「Go! Together!」でも、毎年こうやって様々な場面で参加をさせていただいております。

さらに本学におきましては、幕張メッセで行われるパラリンピック正式種目の車いすフェンシングですね。この競技ボランティアを、今現在育成を始めております。ご講演いただきました馬場先生の働きかけで、いろいろな大学がつながり、現在のところ、帝京平成、敬愛、筑波、千葉、植草、淑徳とわたり、今100人ぐらい学生のボランティアが養成されつつあります。1人の選手に3人ボランティアが付かなきゃいけないんです。本学の学生にも、「藤森さん、次の講習いつですか」ってよく聞かれるんですね。

さらに、パラスポーツのフォーラムというのが8月18日に千葉で行われます。県のバラ『旅』応援プロジェクトに千葉商大の皆さまが関わっておられるわけですけれども、本学の先ほどポロシャツを着ていた、「化けたよ」という学生2人が、途中からなんです。学生実行委員会に入れてもらい、育てていただいております。本当にありがとうございます。

さらに、「ボランティアトライアル2019」というものの準備が進んでおります。これもやはり今日お越しいただいた神田外語大学の篠村先生をはじめ、関係の皆さまにいろいろご紹介をいただきながら、これからスタートしてまいります。留学生を動員するちょっと新しい形のこのオリパライメントに、ここにも学生の実行委員会ができると聞いておりますので、学生たちに関わってもらおうと思っています。

さて、ボランティアの話の急いでしてまいりましたけども、敬愛大学は別にボランティアが専門の学校ではございません。私たちは、お手元にいろいろ資料があって、

ラテン語の引用もあるんですけども、私たちが考えている敬愛大学流のボランティアは、「できる人が、できるときに、できることをする。レポートが忙しければ、次回やればいい。力がない。スキルがなければ、今自分の持つスキルが役に立つときにやればいいよというふうに、いつも言っています。このボランティアを進めていく上で、競技団体、地域の方、ボランティアを依頼してくれる皆様には、「ボランティア活動を通じて、学生たちに学びの機会を与えていただけるように、工夫をお願いします。ただ、お手伝いだけじゃ困ります。学生たちが学べるように、ちょっと仕掛けを工夫いただくと、非常にありがたいんです」ということをお願いをしております。

この動画は、もう今までも随分見る機会がありました。「ボランティアは東京2020を動かす力だ」と。私たちは学生に対してもいろんな情報を流します。最近はTwitterでも、皆さまの目に触れる形で敬愛の学生、こんなことでオリパラ頑張ってるよ。地域の皆さんと一緒に頑張ってるよという発信を始めさせていただきました。社会福祉もボランティアも専門ではない学校ですが、私たちは敬愛の学生を、様々な形で街で勉強させたい、街に学ばせたいと思っております。そして今回のオリパラが、敬愛にとっては、大きなチャンスと思っております。ぜひ今後ともご指導いただければ幸いです。ありがとうございます。

**藪内** どうも、ありがとうございます。それでは、続きまして、パネルディスカッションに移りますので、パネラーの方は、前の方にご移動お願いいたします。熊谷市長、お忙しい中、どうも、ありがとうございます。ここからの参加になりますけども、よろしく願いいたします。

**熊谷** よろしく申し上げます。

**藪内** それでは、ご到着されたばかりなのですが、熊谷市長からごあいさつと、最初のコメントをお願いしたいと思います。ここからスタートさせていただきたいと思えます。

**熊谷** あらためて、皆さん、こんにちは。熊谷でございます。敬愛大学さんが、こうし

た形で続けてシンポジウム等を開催していただいていることに感謝しています。本当に、ありがとうございます。私たちが千葉市が、まず、車



熊谷 千葉市長

いすスポーツの聖地を目指そうというのが、平成24年なんですね。まだ日本に、東京にオリンピック・パラリンピックが来るのが決定する前でした。例えば、淑徳大学さんが車いすバスケット、学生主体の大会を実施して下さっていたり、国枝選手はじめ、多くのパラアスリートのスポーツ用車いすを作っている「オーエックスエンジニアリング」が、千葉市にあるといった、様々な車いすに関わる財産が千葉市にあるということで、車いすスポーツの聖地を目指そうと、私たちはスタートしたんです。

そこから、オリンピック・パラリンピックが決定し、パラリンピック4競技の開催地になり、ますます、私たちはパラスポーツに力を入れていこうと決めました。まだまだ、その当時は、バラの重要性というのは、オリンピックに比べれば、注目度は低かったのですが、2020年には必ず違う景色がやってくるし、こさせなきゃいけないので、頑張っていこうということをやってきました。行政は、トップが言えば、ある程度動くのですが、例えば、経済界だったり、こうした教育機関であったり、さらには、市民の皆さまがたは同じようにはまいません。正直に言いますと、聖地化構想をスタートさせた平成24年には、10年ぐらい、ないし15年ぐらいかけて、そういう街を作っていこうという姿勢だったのですが、思いのほか、早く東京でのオリ・パラが決まってしまったので、実は、東京が決まったとき、喜び半分だったんですね。半分はもう来ちゃったっていう気持ちで、もう少し時間が欲しかったぐらいだったのです。

ですから、2020年に我々が目指す到達点まで、間に合うかなというのが、非常に大

きな懸念だったのですが、正直、昨年ぐらいから、グググッと教育機関の皆さま方であつたり、経済界の方々、そして、市民の皆さま方が、私たちの思っている以上に、いろいろな活動をスタートしていただいておりまして、いよいよ、千葉はオール千葉市、オール千葉県で、そうした動きが進んできたなというふうに思っています。あらためて、それぞれの分野で取り組んでこられた皆さまがたに、心から感謝をして、このパネルディスカッションに参加をさせていただきたいと思います。どうぞ、よろしくお願いいたします。

**藪内** どうも、ありがとうございます。千葉を変える。オリンピック・パラリンピックを越えて未来を見据えるレガシーを残す。今日はそういったテーマで、進んできたかと思うのですが、今しがた、敬愛大学の取り組みとして、学生に気付きがあったという話を、ご報告させていただきました。

まず馬場先生から。今日のテーマは生涯スポーツでしたが、パラスポーツの交流会にも学生を連れて、積極的に参加されているというお話がありました。やはり、学生が変わる。あるいは、そこに参加されている周りの市民、あるいは、他の参加者の方が、変わってきているというお話、何かありますでしょうか。

**馬場** そうですね。学生ともう、年がら年中、いろんなスポーツボランティアに参加をするんですが、授業って、1対何十人、何百人で、何、勉強してんのかなって。よく分かんないなっていう気がするんですけども、一緒に行って活動することで、話聞いているだけだと分かんないことが体験できたり、人と関わったり、おじさんと関わったり、おじいさんと関わったり、おばさんと関わったりっていうのが、学生にとって、ものすごい新鮮な感じがするらしいんですね。

私の今、関わっている学部・学科は、トレーナーになりたい学生、教員になりたい学生のコースなんですけども、なれる人間って限られてるんですね。かなり、競争厳しい。そうすると、なれない人間はドロップアウトしていくっていう感覚らしいんですね。いや、そうじゃないんだよって。スポーツに関わる仕事はたくさんあるんだ

よ。ボランティア、みんなで行ってみよう。メディアだって行政だってあるし、いっぱいあるんだよってことを言って、一緒に活動していく中で、実際、スポーツイベントの会社に就職している学生がいたりだとか、メディア受けたんだけど、残念ながら最終試験落ちましたみたいな学生もいたりしますが、社会に出てからこそ、成長できる場面ってというのは、たくさんあるんだと思ってます。

ただ、一学年100人ぐらいいて、私の活動に興味持って参加してくれるの、ほんの数人ぐらいなんですよね。数人でも、4学年で何十人になってっていうと、いろんなイベントに活動できるようになって。いろんな所から、「いやあ、帝京平成の学生さんって、すごい一生懸命に頑張ってくれる」、「いやいや、ごくごく一部ですから」っていうような話をするんです。ただ、そういう子たちが呼び水になって、影響を受ける子も周りに出始めています。それは、社会につながる。仕事、自分の将来につながるっていうことが、すごい重要だなというふうに感じています。

**藪内** 次に、市長にお伺いします。千葉市立の中学校で、パラスポーツの積極的な取り組みをずっとされてきましたが、その結果、子どもたちが変わったというような報告は、上がってきていますでしょうか。

**熊谷** これは、教育委員会、教員の皆さんから、本当に非常に多くの意見をいただいております。パラスポーツを体験することで、当然ながら、この競技の楽しさと、一方で難しさを、学ぶよりも体験、体感することで、実感に変わってきているということがあります。それから、アスリートが来たり、もしくは、始める前は、障がい者のスポーツという、どこか、ちょっと距離があるものとして見ていたものが、最後は、もう誰とでも楽しめるスポーツなんだという考え方に、みなさん変わっていくということですね。

それから、敬愛大学さんのテレビ番組での紹介にもありましたとおり、協力すること、チームワーク、ルールを守ること。このあたりが、他のスポーツ以上に、グッとくるみたいで、日々の学校生活においても、

その気持ちが生かされている学生、子どもたち、生徒というのが出てきているということですね。

それから、障がい者を含めた多様性への理解です。いろいろな人がいるっていう、多様性も、理屈ではなく、感覚で分かるようになってきています。実は、私が車いすスポーツの聖地や、パラスポーツを通して共生社会を作っていくというテーマについて、総合教育会議において、教育委員会とこの問題について共有したときに、千葉市の教育委員会には、わがことのように取り組んでいただきました。この問題についてのプロジェクトを組んでいただいて、無理にガーンと現場でやるのではなく、本当に、先生方を巻き込んで、カリキュラム作りをし、何年もかけて、現場、全学校に、できる限りの浸透をしていただきました。今では、障がい者アスリートの学校訪問はもう、1万5,000人が体験をしておりますし、こういう形で、千葉市の多くの学校の子どもたち、さらには、教員が体感してきていますので、千葉市は、学校も教育委員会も、全面的にこうした共生社会作りに、率先してやってこれ、その成果が出ていると思います。

会場に子どもたちがガッと来て、しかも、単に動員されただけじゃなくて、競技を分かっている子どもたちが来ているっていうのが、もう、プレーしているパラアスリートには分かるわけです。終わった後に、憧れの目で、サインくださいと言われます。今でも覚えているのは、3年ぐらい前の大会のときに、「アスリートとして、こんなにサインをくださいと子どもたちから言われた国、市は初めてだ」っていうふうに、興奮しておっしゃっていた選手もおられました。結果的に、そういう雰囲気が出てきているというふうに思っています。

**藪内** ありがとうございます。最初の貞石課長の講演の中で、最後に、大学に期待する活動というところに、はっきりとあったと思うのですが、そうやって、小・中学生は変わり、その小・中学生が高校に上がり、大学に上がってきたときに、また、それをさらに伸ばすような準備をしなければいけないということで、まず小学校、中学校の

状況のお話をうかがわせていただくことは、大変重要だったと思います。

共生社会という言葉が、冒頭からずっと使われてきていましたが、開催趣旨での根本先生のご説明にもありましたように、まだ、障害ということに対する偏見はありますが、同時に理解したいという関心も、非常に高まっているという中で、パラスポーツを通じて、理解をするとか偏見をなくしていくということではなく、共生社会ということ、文字をよく見てみれば、共に生きるということです。そういうことについて、先ほどの高橋さんのお話、それから、馬場先生のお話の中にも、一緒に楽しむ、一緒に体験することが、また、熊谷市長のお話の中にも、そのルールや連携が一般のスポーツよりも、余計にいろいろと考えなければいけないし、そういうことを通じて、子どもたちが変わっていき、そういうことを通じて、共に生きていくということを体感する、実感することが大切だとおっしゃられていました。そういうことだと思うのですが、共生社会ということについて、一言ずつ、コメントをいただければと思うのですが、高橋さんからお願いします。

**高橋** はい。先ほど、たくさんしゃべらせていただいたので、申し上げることはないんですが、私も2015年までは、そういう方、障がい者と一緒に仕事したことないと申し上げたましたが、しょっちゅう一緒にいて、一緒に行動していると、特別なものとして共生社会を説明すること自体が、今の私には、何か恥ずかしいというか、面倒くさいんですね。家族がいるのが当たり前なのに、家族といることがどう幸せですかって聞かれたって、ごく当たり前になっているということなんです。せっかくのご質問なんで、例えばの例を申し上げます。

私が協会に来た当時、パーティーがあって、車いすラグビーの選手と一緒にテーブルになって、私、まだ来たばかりだから、早く親しくなんなくちゃと思って、いろいろおすしとか、食べるものを持って、buffetスタイルだから、テーブルの上へ置いたんですね。こう、おはしなんか持ってきてたら、選手はしゃべってはくれるんですけど、手を付けられないですよ、食べも

のに。あれっと思って、「お寿司とかあんまり好きじゃないんですか。何か好きなもの持ってきましょうか」と聞きました。すると、「そうじゃないんですよ。私たちって、指が曲がらないから、おはしを持ってきていただいているけど、おはし使えないし、スプーン、フォークもこれだと使えないんです」と言われ、もう、顔から火が出るといふか、血の気がスッと引いた。いいことをしてるつもりが、偽善者みたいな感じになって、情けなくて。「じゃあ、どうしたらいいんですか」って聞いたんです。そうしたら、「太巻きか、サンドイッチがあるとうれしいんです」って言うから、それを持ってきたんです、あったから。そしたら、彼らは、サンドイッチをどうやって食べたかっていうと、手は曲がりませんから、曲がる範疇でガバってやって、上向いて、こうやって口に入れたんです。太巻きずしも同じなんです。そうか。それを知ったら、ハンバーグ。太巻きずしとサンドイッチを持ってきたら、喜んで「高橋さん、すみませんね」って、それだけのこと。

つまり、一緒に何かやれば、すぐ分かります。その1歩目が踏み出せれば、いろんな所で1回経験してもらえれば、すぐ分かるから、それをするっていうことが、言葉にすれば共生社会かもしれないけど、それから、何かやることありますかって。例えば、優先席の所にお年寄りだってお座りになりますかって言ったら、俺は、年寄りじゃないからいいよっていう人だあって、健常者だっているじゃないですか。それと同じように、障がい者だあって、いいですよって、ありがとうっていう人もいる。一緒ですから、最初の一声、普通の健常者と同じ。

最後に、これ、1個だけ。彼らが一番喜ぶこと。どうしてけがしたんですか。どうして障がい者になったんですかって聞かれることを、私が知っているメンバーは、ほとんど喜びます。「だって、高橋さん。明日、急に包帯で手をつつてきたら、どうしたのってみんな言うでしょ。それと同じですよ。どうしたのって言われたら、こうだったんだって言いたいだけ。同じにしてもらいたいな」って言います。共生社会って、そういうことじゃないかなっていうことで、お

答えとさせていただきます。

**藪内** ありがとうございます。馬場先生のお話は、先ほどの共生社会ということにあたるのかなと感じました。共生社会というのは、誰でも、いつでも、どこでも、いつまでも、というように、生涯スポーツの説明としてもありましたが、誰でも、年齢も、それから障害かどうかをも超えて、そういうことも含めると思うのですが、あらためて、共生社会について、何かコメントいただけますか。

**馬場** ちょっと視点ズレちゃうかもしれないんですけども、最初に紹介したとおり、私は、スポーツに救われた人間だと思っているので、ただ、スポーツにうまい人は、私にとっては当たり前になっていて。それを、年取っていくと、困っている人がいると、一緒に何かする。してあげるんじゃないんですよね。一緒に何かする。どうしてもできないことがあったら、助けてあげるって言い方は、失礼ではあるんですけども。何かするのが、私にとっては当たり前になっているので、学生に、「ちょっと今度、こういうボランティアがあるから、一緒に行こうよ」っていうと、何て言われると思いますか。「先生、それ、幾らもらえるんですか」って聞かれます。「それは、アルバイトだよ」って。「アルバイトとボランティア。ボランティアはなんで、何かしに行ってお金もらえないんですか」って言われてしまう。それが、今の若者の価値観なんだなっていうふうに思うんですよね。そこで、何か面白そうだから行ってみようっていう学生さんも、もちろんいるんですけども、大半は、幾らもらえるんですかっていう応え。私と一緒に活動している学生たちも、友達から言われます。「なんでお金もらえないのに、馬場先生と一緒にそんなことやってんの」って言われて、ちょっと心、折れそうになったらしいんですが。慣れれば楽しいから一緒にやろうって言って、やっていきます。だから、いろんな価値観、変えていかないと、駄目なんだなと思っています。

もう一つは、子どもは、今、熊谷市長のご尽力で、パラスポーツを体験していつてゐるのに、親のほうがなかなかついていけて

ないっていう感じがするんですよね。だから、子どもから参加したいって言っても、親が参加できずに、なんで、そんなことやろの。なんで、そんなの行くのって。もしかしたら、学生たちも、いや、馬場先生は何かこういうの行こうって言うけど。それ、おまえ、幾らもらえるのって、親が言っている可能性があるんですよね。そういうことも考えてしまうと、いろんな人が一緒に生きる社会の価値観を、どう作っていったらいいのかなっていうのは、ちょっと悩むところではあるんですけども、とにかく私は、成功事例を作っていこうと思います。これが当たり前になって、当たり前になるっていうのを、悪い言い方が分からないですが、悩み続けてるっていう感じですよ。

だから、ボランティアやったことある人っていうと、1年生の最初はほぼゼロなんですけども、1年たつと、かなりの学生と一緒に参加してくれて、その人たちが進級してってくれるっていう。そこで、何となく、少しずつ変えていくしかないかなというふうに思っています。すみません、ちょっとご質問とズレたかもしれないんですけど。

**藪内** 続けて、馬場先生におうかがいしたいことは、マーケティング業界では、最近、欲望とか欲求がモノではなく、コトになったとよく言われます。今の学生さんたちは、物欲というのはないのでしょうか、じゃあお金かなというような発想しかありません。しかし、そこで、コトということの楽しさ、そういうものを知らないだけなのかとも思うのですが、そのあたりは、どうでしょうか。

**馬場** まさにそうだと思うんですよ。私、学生をボランティアに誘うときも、例えば、「スポーツ何やってんの」って聞いたときに、「実は、バスケやってる」っていうと、「じゃあ、ジェッツのボランティアあるから行こうよ」って連れて行くんですね。「何やってたの」「野球やってる」「じゃあ、ZOZOマリンに一緒に行こうよ」。「サッカーやってる」って言うのと、「じゃあ、ジェフに一緒に行こうよ」って言って、入り口をちょっと下げてあげるっていうようにしています。興味を持ってくれそうなことに参加させる。

そこから、何となく自分の体験で面白かったってなると、そのハードルが少し下がって、もうちょっと違うものに参加したくなるっていう現象あるなっていうことを、何となく、感じています。

それから、今、質問いただいてよかったのが、ボランティアを必要としている団体の方とお話すると、「いや、お金がなくて困ってるからボランティア欲しいんだ」って言われると、それは、学生が無料の労働者で使われるから困ると応えます。だから、学生にボランティアの楽しさを提供している。さっきの藤森さんのお話の学びに近いんですけど、学生がボランティアに行くと、何かやらされたわじゃなくて、行って楽しかったっていう、そういう体験を、何か工夫してくれっていうふうに言うんですね。

例えば、私が学生にごめんねって謝った例で、ボランティアに行くと、「先生、ボランティアつまんなかった」って言われ、「何やったの」って聞いたら、「会場の駐車場整理1日やらされた」って言うんですよ。それなら警備のアルバイトを雇えばいいのになって、後からその団体の方に言って、二度と関わらないでくださいってお断りしたこともあります。相談受けて、そういう話をするんですよね。結構、あるんですよ。

人手が欲しいっていうだけのイベントもいっぱいあって、そんな依頼もいただくんですけど、「先生、帝京平成大学の学生、いっぱいボランティア行ってるから、40人出してもらえませんか」っていうと、「40人出すのはいいんだけども、その子たちに、どんな楽しみ、喜びがありますか」って聞いたときに、答えられないときは、「すみません、もうちょっと考えてから、もう1回、来てもらえませんか」って言う。失礼にならない程度に、お答えするようにしてます。

だから、学生も別に、お金が本当に欲しいわけじゃないと思うんですよね。何か、そういう体験があまりにもなさすぎて、貧弱すぎて、何とか最初の1個を作ってあげる努力が大事だなと思ってます。なんで、私がそこまで学生にやってあげてんのかなって、ちょっと悩むところもあるんですけども、学生サービスかなと思ってやってます。

**藪内** ありがとうございます。敬愛大学で、先ほど報告いただいた藤森室長は、ボランティアセンター長という役割を担っておりまして、学生のボランティアに対する考え方とか、それから、気が付いてしまった学生は、それは楽しいこととしているということなのかなど、そのあたりをご紹介いただけますか。

**藤森** 今の馬場先生と、基本的に、私はそんなにスタンスは変わらないですね。いろんなご依頼をいただきますけれども、私の場合はスポーツが専門ではないので、どちらかというところが多くなります。そうなったとき、例えばパラスポーツフェスタだとか、千葉市からこういうご依頼が来たんだけど、どうかなっていったときに、大概本学の学生は躊躇します。その理由の一つが、1人で行くのが不安なんです。1人で行くのはちょっと怖い恥ずかしい。どんな世界なんだろう。担当してくださる方が熱心な方であっても、初対面だし分からない。だから「じゃあ俺も行くから、一緒に行こうぜ」って言うんですね。「藤森さんも行くんだったら、一緒に行くわ。でも藤森さん、走れないでしょ」「そうなんだよ」なんて言いながら、一緒にやります。私は、もっぱらカメラマンをしたり、いろいろな活動していく中で、学生にちょっと声掛けをして、「どうだった、面白かった？ おおそうか」。特に大学生の場合、途中で20歳を超えますので、「いいよ。これでもしいい関係ができて、また来年も来いよとか、またこの次の回も来いよって言われたら、20歳を超えてれば、飲んでもいいからな。おごってもらっていいぞ」っていうふうに言います。そういう大人のお付き合いができるような機会の入り口が、ボランティアだというふうに考えておりますので。

実は明日、明後日の稲毛のせんげんまつりでも、本学からは40人のボランティアが出てくれます。稲毛高校の女子生徒が1人、検見川高校からは10人ぐらい出てくれます。そういうのを受けて相談に乗ると、「やりたいんだけど、ちょっと恥ずかしい、怖い？ じゃあ、一緒にやろうよ。俺もやるから、一緒にやろうぜ」っていうのが、一番入り

口としてはハードルが下がります。俺もやってるんだから、できるんだから、みんなにもできるよって言うことで、裾野も広がっていくような気がします。

**藪内** ありがとうございます。共生、共に生きる。それは、年代を超えて。それから、障害のあるなしにこだわらず、無関係に。また、外国人との多文化共生社会という言葉もよく議論されるわけです。先ほど、コトっていうことを申し上げましたが、そこで何が楽しいかっていうと、結局、人と人がつながる。そのつながりが、年代を超え、また国籍、民族を、文化を超えて、そして、障害のある、なしを超えて、そこで、また新しい気付きがある。それは、人とつながりが増えることが楽しいということだと思います。

貞石課長のお話の最後のほうで、地域包括ケア、自助、共助、公助というお話がありました。実は、健康寿命を延ばすということに、直接、関わっていくようなことになるのではないかと考えているんですね。ということで、今、私の考えを述べさせていただきましたが、熊谷市長のほうから、地域社会、経済、それをまた、政治としてどこへ持っていくか。そういう観点から、何かコメントいただけませんか。

**熊谷** そうですね。オリンピック・パラリンピックって、世界最大のイベントのひとつですよ。最大のコト体験だと思うんですよ。世界中から多くの異なる人たちも押し寄せてくるんですよ。自分たちの理解の範疇を超えた人たちも、いっぱいいるわけですよ。先ほど、共生社会とは何かという話がありましたけども、それって、もう自分で生きるだけでは、絶対に知り得なかった世界を知るっていうことだと思うんですよ。多分、障害も、私もこの仕事をしているおかげで、いろんな障害の特性を持った方々に会うんですよ。いまだに知らない障害とか、想像していなかった障害の種類を持った方々に出会うわけなんです。障害ではありませんが、LGBTの方々とも同じように、そういう方々の目線というのは、常に新鮮で、なるほどねっていうふうに思います。最近ニュースでも出ますけど、イスラムの人たちはこれが食べられないって聞く

と、これを食べれないのかと驚く。さらに、それで料理したフライパンで、他の料理を作っても駄目だと言います。フライパンまでこだわると、本当に驚くんですね。

ですから、こういうことを経験していくと、違和感とか違いが気持ち悪くならなくなるんですよ。人間って、最初は保守的なので、違いとかに出会うと排除のほうに、嫌悪のほうにいくんですけども、オリンピックぐらい、どっかり一気に来ると、麻痺しちゃったり、楽しくなっちゃったりするんですね。そうすると、地域社会の日々の生活においても、自分と違うという人に対して、何か与えてくれる人っていう気持ちは、変わってくるというふうに思うんです。

結局、地域包括ケアとかボランティアとかいろいろ言っても、さっきおっしゃっていただいたとおり、ボランティアが何かしてあげると思っている限りは、続かないですよ。それに何かを自分が得るんだっていう気持ちがそこにないといけなくて、僕らは、地域主体のまちづくりというのは、地域で支え合いのまちづくり、助け合いのまちづくりって言ってます。与えているっていう感覚だと、みんな参加してくれません。とにかく、ボランティアの体験が、感動体験として残っていかない限り、他のボランティアというか、支え合いにもなりません。オリンピック・パラリンピックって、少なくとも、僕ら行政が用意できる限り、最大の感動に一番近いボランティア体験、感覚が体験ができる世界なので、私はそこをすごく大事にして、1人でも多くの市民の皆さんが、何らかの形で、オリンピック・パラリンピックに関わって、何か世界が、俺、ちょっと広がったよ。私、広がったよっていうふうに思ってもらえるような来年を作りたいというふうに思ってます。

**藪内** ありがとうございます。こんな素晴らしいチャンスはない。自分の世界、自分の感覚、そういうものを広げる。大きく広がるんだろうと思いました。残り時間も少なくなってきたのですが、ここで、フロアから、ご意見やご質問もあるかもしれません。いくつか、時間の許す限り、承りたいと思います。

**和田** 千葉商科大学の和田でございます。本

日は、本当に素晴らしいお話をありがとうございました。私からは、想像としましては、今日、本当に熊谷市長含めて、視点を変えるということ。これは、もう、すぐには変わらずに、やっぱり、時間というものが必要なんだろうな。ただ、その視点を変えるという、大人が本気にならないと、社会が変わらない。そこで、これは、私が教育現場に携わる者として、それから、実は、今日、ここに私の教え子といいたいでしょうか。学生が何人か来ております。学生の立場、学生に対してのものの見方っていうものを、これ、皆さまがたにも問題提起として、三つ申し上げます。

一つ目は、お金の問題です。これは、総論として、ボランティアと、それから、馬場先生もおっしゃいました、ボランティアとアルバイト。これ、根本的に違う。ただ、これ、現実のリアリティーです。うちの学生の半分は奨学金をもらって、要は、借金をしながら学んでいます。この借金を、卒業してから返し続けるという、このプレッシャーで、学生たちは、本当に大変な学生生活を送っている。ですので、学生たちにとって、学びという目的でもって、様々な体験をしようとするほど、実は、持ち出しが出ていくんですね。ですので、本当に学生たちの言葉の中から、今日は、本当はアルバイトをしていれば、1万、2万、これが返済のお金になっていくんだけど、でも、自分の人生のために、僕は、私は、ボランティアとして貴重な体験に行くんですという言葉を聞いたときに、私は、やはり、これ、一つ大人の覚悟として、お金をあげるのではなくて、ボランティアに参加したという学生に対して、これ、ピョンチャンが実は、そうだったそうですけど、大学生が参加し終わった後に、お金という価値じゃなくて、何らかのインセンティブをきちっとあげていたというお話を聞きました。これが、どういう価値のものかというのは、議論が必要だと思います。

二つ目。インセンティブ。これ、違う意味のインセンティブでインセントなんですけど。実は、高校とか大学で、ええ、こんなにいっぱい来てるのっていうケース、いっぱいあります。学生たちに聞きます。君

ってすごいよね、その意識。ところが、簡単ですよ。これ、単位なんです。こういうことなんです。私は、これ、単位でもいいと思います。行くきっかけとして。ただし、これに行けばいいんでしょ。単位になるんだからというような形で、これ、教員の問題です。教員が、それを、ただ単に、単位という目的だけで学生を動員させようとしたらば、それは問題だろう。

三つ目。これ、馬場先生、素晴らしいと思うんです。学生たちが、貴重な時間、そして、アルバイトをすればお金が入るのに、結果として、それは自分の将来の学びのため、成長のためということで、様々な参加するときに、馬場先生と一緒に参加するとおっしゃいました。多分、その参加しているときに、馬場先生は、しっかりと学生を見てらっしゃる。学生の成長をしっかりと見ている。そして、学生に声掛けをしている。そこが、学生たちにとっての、一番大きな学びだろうと思います。今日、ここにおられる皆さまがたに、最初に申し上げたとおり、学生たちというのは、決して裕福ではない。本当に、苦しい生活の中で、何とか成長しようと生きているということ、申し上げたいと思います。

最後に、これは、ここだけは言っちゃいますけど、私、文部科学省にも一言、言いたい。実は、皆さまがた、代返とか、出席だけ取ったら静かに後ろから出ていくことって、やってましたよね、昔。いや、私もやってましたよ。藤森室長もやってましたよね。それ、いかにばれないように、ことを進めるかって、これも素晴らしい能力だと。今、駄目なんです。それこそ、システムチックに、そして、15回しっかり授業出なきゃならないという。もう、徹底的に縛られてます。実は、シラバスに、予習何分、復習何分、そこまでしっかりと書かれてるんですよ。そこまで学生を縛り付けておいてですよ、一方で、これから、オリ・パラという大変な、一生で1度あるか、ないかという学べるチャンスがあるのに、そこがアンマッチングなんです。ここは、千葉県では厳しいと思うんですが、千葉市というのは、若干できる可能性があります。もう少し学生たちに余裕を持たせていただ

けたらいいなというのを、学生の代わりに、代弁者として、最後の最後に申し上げます。

学生たち、ここにいますけども、金ないんですよ、本当に。本当に、金ないんです。後で聞いてみてください。彼ら何したかっていうと、自分たちで資金集めたんですよ。どうやって集めたか。クラウドファンディングです。今度、10月にポッチャ大会をやるという企画を立ててくれてます。そのための資金、クラウドファンディングで180万、集めました。これ、学生たちの力です。それに対して、大人たちが、よっしゃ、分かった。応援してやろうじゃないか。それが、具体的なリアリティーだと思います。学生たちにボランティア行けよ。これが、学べるチャンスだよ。だったら、大人たちも、資金については、俺たちが協力するよ。企業が、君たちのバックアップするよという空気、文化が、もう少し出てくれたらいいなということを感じました。すみません。以上です。

**熊谷** いいですか、ちょっと。

**藪内** はい。

**熊谷** 和田先生、おっしゃるとおりだと思うんですよ。私たち行政ができるのは、例えば、消防団を学生時代にやってくれた子たちに、就職活動に使ってくださいと、千葉市から証明書を出すことです。要はそういうことで、行政ができるのは、パブリックな機関として、武器になるようなものを提供するっていうのが、私たちのできることだと思っています。お金の部分は、これを行政として何ができるかっていうのは、ちょっと、経済界とお話をしたいなと思います。最後に大変驚きました。私、ほとんど大学に出ていなかった人間なので、授業はすごく大事だと思いますが、そのようなマネジメントができる学生というのが、この時代、大事だと文科省も言ってるわけですから、そこは、なるほどなど、すごく、現場のリアリティーを感じました。文科省と話するときには、ちょっと私も、そういうのは何とかならんのでしょうかと試してみたいな。来年、特にそうしていただきたいなというのは、話をしたいというふうに思います。

**藪内** 非常に貴重なやりとりがなされました。私ども敬愛大学も、大変参考になるという

か、参考にしなければいけません。高橋さんのお話が、大変、凝縮された、普通の3分の2の時間で、私も本当に感銘を受けました。最後に、2人の22回。そのお話をしてくださしまして、私ども、今日、参加者で持ち帰り、ぜひ、実行したいと思います。その辺について、高橋さんのほうから、また、何かございますでしょうか。

**高橋** 多分、この機会が、この時間では最後の発言になると思いますので、お礼かたがた、一言、申し上げたいと思います。市長がいらっしゃる前に、千葉市は、私が知る限り、全国の中で一番パラリンピックに理解がある市であるということ、具体例も含めて申し上げまして、重ねて、直接、お礼を申し上げたいと思いました。引き続き、よろしく願いいたします。

そうした意味では、私が2015年の4月にこの世界に来た頃の比較で見れば、ものすごく盛り上げていただいているし、今日、学生さんのお話もいっぱい聞かせていただいて、ああ、そうなんだと。また、今、千葉商科大学のお話を聞かせていただいて、スポーツの力、パラリンピックの力ってすごいなど。もし、来なかったら、ボランティアの方々、千葉商科大学の半分の奨学金の学生さんが、いかにお金がない中で、そうはいつでも頑張ろうっていうようなお話は、多分、パラリンピックが来なければ、ボランティアにつながらずに、こうならなかったんじゃないかなと思いますし。敬愛大学さんが、こうやってこういう場を設けていただける。市長もお休みの中、来られる。とにかく、これは絶好のチャンスで、皆さんがやっていただいていること、すごくうれしく思っています。それを踏まえて、私が楽しみにしていることを一言申し上げて、終わらせていただきます。

東京パラリンピックは、来年、2020年8月25日の火曜日。多分、発表になってませんけど、夜8時から開会式が行われて、そして、9月の6日の日曜日で終わると思うんです。閉会式も夜です。オリンピックも終わる、パラリンピックも終わる。私が楽しみにしてるのは、9月7日、月曜日の朝なんです。カーテンを開けて外を見てみたら、共生社会という景色に変わっているのか。9月

7日、月曜日の朝が、これまでと同じ、パラリンピックが来る前と同じ景色なのか。その景色を楽しみに頑張らせていただきますので、どうぞ、ご協力をよろしく申し上げます。以上でございます。

**藪内** ありがとうございます。学生に対して、私ども敬愛大学も、教職員、学生、全員がこれから、来年度8月、パラリンピックに向けてどうしていくのか。まず、関心を高めていかなければなりません。日本の代表選手だけではなく、先ほど、高橋さんのお話にあったように、外国の選手たちについても、その人の人生だとかいろいろと、それを知れば知るほど、興味を持っていくというような実感があります。今、パラリンピックサポートセンターというウェブサイトがあって、それを見ますと、いろいろな選手や競技の紹介などが掲載されており。千葉市のほうでも様々な、広報、情報提供があるかと思しますので、私どもも、それを細大漏らさずキャッチしては、学内に提供して関心を高めていきたいと思います。

そして、いよいよ来年度になりましたら、前期の、例えば、ゼミごとに、学生とパラリンピック、それから、共生社会について話し合いをするほか、ボランティアに参加をするなり、競技を見に行くなり、様々なことで関わっていくというスタンスで、これを体験をし、最後にそれをまとめるというような形で、大学の中にも盛り込んでいけたらなと思います。ただ、そこで、何人かの興味を持つ学生が現れるだけではなく、それを、どうやって、何十人、何百人というような、大学の中だけではなくて、地域の中、千葉市の中で広がっていくかということが、これからの私たちの課題かなというように思います。

最後に、このパネルディスカッションを締めくくるに当たりまして、お手元の資料では、敬愛大学の三幣学長からご挨拶とありますが、ただ単に閉会のあいさつではなく、パネルディスカッションの最後の発言として、コメントをお願いいたします。

**三幣** わざわざ土曜日の貴重な時間に、多数のご参加を、ありがとうございます。非常に中身の濃い、数時間のシンポジウムになったと思います。そして、盛り上げてい

いただきましたご講演、貞石様、高橋常務理事、お忙しい中、遠い所、ありがとうございます。そして、馬場先生。面白いお話を交えていただき、ありがとうございます。熊谷市長、常においでいただき、今回もありがとうございます。

敬愛大学は、ご承知だと思いますけれども、建学の精神を、敬天愛人としております。天を敬い、人を愛するというので、この理念は、このシンポジウムのテーマでもあります共生社会を作る上で、非常に大事な考え方ではないかというように思います。大学、あるいは学園といたしましても、これを生かし、また、実践していくということで、共生社会を作り、支え、そういう人を養成していけるよう努めております。

そこで、来年のこのオリ・パラということでありますが、これをさらに推し進める上で、この機会というのは非常に大事であると思います。どのように関心を持ってもらい、学生の参加を多くしていくかということ、いろいろ詰めてはおります。自分の目で見、耳で聞くということは、非常に大きなインパクトがあり、観戦できる機会を、これを若い人に与えるということが大事なことではないかというように思います。

オリンピックのチケットの入手が非常に難しいと聞いておりますが、パラリンピックは、また別のやり方も考えられるのかなというような期待も持っております。高橋さんのお話ですと、同じように、個々に申し込むということになっているようにうかがえました。そうすると、果たして、若い人のチャンスがどれだけ作れるのかな、というところが気がかりになりました。以前、企業でまとめて購入したものの客席に訪れず、チケットが眠ってたという事例があったことも思い出されます。

今回、パラリンピックもオリンピックも、学生にとっては、夏休みといたしますか、授

業のない機会です。要は、朝から、あるいは夜でも、時間のほうは比較的、取りやすく、そういう立場にある世代ではないかなと思います。個々にポツポツ行くというよりも、何人か友達も含めて参加できるということが、また楽しみを高め、参加意識がさらに大きくなるのではないかなというようにも思います。

ということで、お願いしたいのは、千葉市で行う競技だけでいいと思うのですが、例えば10人とか50人、そういう単位で、まとめてチケットを購入できる道を、設けていただけないかどうか、ということです。これは、責任を持って席を埋めるということもあり、とにかく、満席にするということが大事だと思います。これからの日本を担う、あるいは、グローバル化や高齢社会がさらに進んでいく、そういう中で、共生ということを学ぶことは非常に大事だと思います。ぜひ、若い人が多く参加できるようなことを、ご検討いただければ、大変ありがたいと思います。また、それが可能ということとなりますと、本日の、このシンポジウムも、大変、意義深い時間だったということが言えると思います。ぜひ、お考えいただけたらありがたいと思います。

以上であります。いずれにしても、これを機会に、千葉市が共生社会の先頭を行くところを、ぜひ、示せるよう、本学の学生もその中に入れるよう、引き続きご指導、ご協力、お願い申し上げます。本日は、どうも、ありがとうございました。

**藪内** 締めにあつさわしい提案とご挨拶、ありがとうございます。私どもも、いろいろと課題をいただきましたし、ご参加の皆さまにも持ち帰っていただくことがあったように思います。本日は、会場にお越しくださいました皆さま、ありがとうございました。これにて、閉会といたします。

くまがい・としひと Toshihito Kumagai  
たかはし・ひでふみ Hidefumi Takahashi  
ばば・ひろき Hiroki Baba  
ふじもり・たかゆき Takayuki Fujimori  
さんべい・としお Toshio Sanpei  
やぶうち・まさき Masaki Yabuuchi